

WELL認証・WELL Health-Safety Ratingへの取組み

吉野 攝津子 山田 昇 吾

Efforts to Achieve WELL Certification and WELL Health-Safety Rating

Setsuko Yoshino Shogo Yamada

Abstract

The demand for visualization through global indicators of the built environment, which focuses on people's health and well-being, is expected to increase. This report outlines the WELL Building Standard™ and WELL Health-Safety Rating, which are the most widespread third-party evaluation systems for healthy buildings worldwide. Additionally, this presents the efforts of the Obayashi Corporation for WELL acquisition and the issues and prospects of WELL Certification. Examples from the Technology Research Institute of Obayashi Corporation and a hotel are presented. For issues of WELL certification, notable points from both the project management and the certification system are shown.

概 要

人々の健康とウェルビーイングに配慮したビルト・エンバイロメント（建築や都市の環境）の目指すべき方向性や達成度を、グローバルな指標で可視化する性能評価への要請は一層高まることが予想される。本報では、健康的な建物の第三者評価制度として世界的に最も実績のあるWELL認証とWELL Health-Safety Ratingについてその概要を解説した。加えて、事務所、研修所、ホテルと異なる用途でWELL認証取得を目指した大林組の取組み内容を示した。取組み内容として2022年本年5月に再認証を取得した大林組技術研究所本館テクノステーションと2020年8月にホテルとして世界で初めて認証取得した某ホテルにおける対応を示した。また、プロジェクトマネジメントと認証システムの両面から留意すべき点を示した。

1. はじめに

SDGs（国連が推進する持続可能な開発目標）の目標3「すべての人に健康と福祉を」を達成するのに必要な要素として、人々の健康とウェルビーイングに配慮したビルト・エンバイロメント（建築や都市の環境）の形成が、近年着目されている。また、これが建物や施設の健康に関する中長期的な価値向上と、その維持につながると期待されている。例えば、オフィスや生産施設等の働く場では執務者の満足度や生活の質の向上と、それらに伴う病気、欠勤、離職、出勤してもパフォーマンスが上がらないプレゼンティーズム低減への効果が見込まれる。商業施設やホテルでは訪れる人々の共感獲得に、企業にとっては健康的な建物に入居することによるブランディング効果と優秀な人材確保につながる。さらに、不動産価値の面では世界的なESG投資の活発化を背景に賃料アップや有利なテナント誘致等が期待される。このような中、2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界的に猛威を振り、ビルト・エンバイロメントにおける健康やウェルビーイングの役割を更に高めた。コロナ収束後も利用者の健康やウェルビーイングに配慮した健康的な建物への需要は高まることが予想される。それに伴い、ビルト・エンバイロメントの目指すべき方向性や達成度のグローバルな指標による可視化と開示は重要度を増すと考えられる。

WELL Building Standard™（以降、WELL認証）は、世界で初めて人々の健康とウェルビーイングに焦点を当てた第三者によるビルト・エンバイロメントの認証システムである。2014年にInternational WELL building Institute, pbc（以降、IWBI）が運用を開始して以降、60以上の国・地域で10,000以上のプロジェクトが認証取得を目指してエントリーを済ませ、その中で660以上が認証を取得している。国内では大林組技術研究所本館テクノステーション（以降、技術研究所本館）が2017年に初めて取得した。それ以降、76プロジェクトが認証取得に向けてエントリーを済ませ、15プロジェクトが認証取得している。また、2020年にはCOVID-19などの感染症やその他緊急事態に対する建物や施設の健康・安全性を評価するWELL Health-Safety Rating（以降、WHSR）がIWBIにより開発された。これまでに世界14,896、国内66のプロジェクトが取得している（2022年6月22日現在）。

WELL認証やWHSRの評価基準に即した技術やノウハウは、人々の健康とウェルビーイングに配慮したビルト・エンバイロメントの実現に役立つ。米国発の認証制度のため、日本での法規や慣習では要件を満たすことが難しいこともある。大林組は他社に先駆けて取り組み、評価基準の意図に基づく要件の代替案の提案、エビデンスの整備、認証機関との協議等のノウハウを蓄積してきた。本報では、世界的に最も実績のあるWELL認証とWHSRについて、概要と大林組の取り組みならびに課題と展望

を報告する。

2. WELL認証とWHSRの概要

2.1 WELL認証¹⁾

WELL認証は、人々の健康とウェルビーイングに影響を与えるビルト・エンバイロメントの機能を設計、建設、運用の面から測定・評価する。2014年10月にWELL v1始動以降、2015年5月始動のWELL v2 pilot を経て2021年1月以降はWELL v2に完全移行した。認証システムはIWBIが制度設計と運用管理を行い、Green Business Certification Inc. (以降、GBCI) がLEEDと同様に第三者評価機関としてプロジェクトの認証を行う。

審査では書類審査の他、GBCIから認定されたWELL Assessorがプロジェクト運用開始後に現地審査を行い、空気質、水質、光環境、音環境、温熱快適性などの環境測定及び各種目視検査により、要件の達成状況を確認する。計画から運用開始まで長期にわたるプロジェクトでは、任意で予備認証取得を申請することもできる。認証取得後も各種点検記録や居住者満足度アンケート結果など定期的な書類の提出が求められる。認証の有効期限は3年間で、認証継続には、取得3年以内に再認証を申請し、書類審査と現地審査で承認を得る必要がある。WELL認証は単体建物をプロジェクトと呼び、評価対象とするが、複数建物から成る街区を評価するWELL Community Pilot、複数建物をまとめて取り扱うWELL at scaleなども用意されている。

評価項目はTable 1に示す、10のConcept (大項目) から構成される。Conceptの下にFeature (中項目)、その下にPart (小項目) に分けられた要件がある。認証を得るためには全ての必須項目(Precondition)の24 Feature, 48 Partを満たした上で加点項目(Optimization)をどこまで獲得できるかで取得の可否と認証レベルが決まる。110点満点のうち、加点項目80点以上でプラチナ、60~79点でゴールド、50~59点でシルバー、40~49点でブロンズとなる。

申請者は、総加点Part 197ポイントから100点分をプロジェクトの特性に合わせて自由に選択する。この仕組みにより、WELL v2は、WELL v1が建物用途毎に異なる評価項目を使用したのとは異なり、建物用途を問わず同一の評価項目の適用を可能にしている。なお、テナントビルの共用部分を対象とした場合はWELL Coreと呼ばれ、若干評価要件が異なる。

2.2 WHSR²⁾

WHSRは、感染症や緊急事態に対する建物や施設の運用方針、維持管理手法、利害関係者の関与、緊急時計画等、稼働中の施設の運用管理を評価する。WELL認証と同様にIWBIが制度設計と運用管理を行い、GBCIが審査などの評価実務を担当する。戸建て住宅を除くあらゆる用途の新築、既存の施設を対象とする。現地審査はなく、提出書類のみで審査される。建築や設備等のハード関連

の要件も含まれるが、基本的に運用管理面を評価する要件項目が多い。

Table 2に評価項目を示す。全27項目の内15項目以上の要件を満たせば良く、必須/加点の区別はない。評価を取得すると建物出入口等に貼って示すシールが得られる。有効期限は1年間で毎年更新手続きが必要である。改修工事を行わなくても対応できること、WELL認証と異なり全館禁煙が必須ではないことから、2020年6月の運用開始以降急激に取得プロジェクトが増えている。特に、遮音性能や温熱快適性の確保、食品提供に係る制限の面でWELL認証への対応が困難なアリーナ、エンターテインメント施設等での取得が目立つ。

3. 大林組の取組み

3.1 WELL認証及びWHSR対応プロジェクト

大林組はこれまで自社施設の技術研究所本館(事務所)、Port Plus[®] (研修施設)に加えて、某ホテルといった用途の異なる大林組設計施工プロジェクトのWELL認証取得に取り組んできた。各施設の概要をTable 3に、外観と内観、および認証マークをFig. 1に示す。

WELL認証の要件を満たすための対応方法を検討するだけではなく、導入した設備や備品が実際に建物利用者により期待される効果を及ぼすのかどうかに関する検証実験も行っている。ここでは認証取得済みの技術研究所本館と某ホテルの事例を中心に紹介する。

3.2 技術研究所本館

本建物はWELL認証運用開始前の2010年に竣工した。CASBEE新築版・既存版とも高得点でSランク認証を受け、2013年には、LEED既存建物の認証を最高ランクのプラチナで得た。当初より健康・快適性を配慮した計画だったが、WELL認証が登場したことから、計画の妥当性を第三者評価により実証すべく認証取得を試みた。本建物では、国内基準と異なる要求事項への合理的な対応手法構築を目指し、改修工事を行うことなく、物品等の追加変更と運用面で対応する方針とした。その結果、2017年11月に国内で初の認証をゴールドで取得した。建物全体区分としては、世界初取得である。なお、本建物はWELL v1で認証取得したため、2.1節に示したWELL v2と評価要件が異なる。

3.2.1 対応内容と評価³⁾ 以下に示すa)からd)は物品などの追加変更と運用面で対応した。

- 換気システムの外気用にMERV13フィルタを設置した。運用面では、2Fデッキの喫煙所を撤去した。
- カフェテリアメニューに食物アレルギー表示、人工成分表示を行った。
- 手洗い所にペーパータオルと使い捨て密封容器の非抗菌石けんを設置した。
- 卓上設置型、簡易型など各種スタンディングデスク (以降、SD) を導入した(Photo 1)。

Table 1 WELL v2の評価項目 (参考文献1)を基に作成
Evaluation Items of WELL v2

Concepts/ 大項目	Features/ 中項目			
	Precondition/ 必須項目	Optimization/ 加点項目		
A: 空気	1.空気質 2.禁煙環境 3.換気的设计 4.建設段階の汚染管理	5.空気質の向上 6.換気設計の強化 7.開閉可能な窓 8.空気質のモニタリングと啓発	9.汚染侵入管理 10.燃焼の最小化 11.発生源分離 12.空気ろ過	13.給気の強化 14.微生物やカビの抑制
W: 水	1.水質 2.飲料水の水質 3.基本的な水質管理	4.水質の向上 5.飲料水の水質管理	6.飲水の促進 7.湿気管理	8.衛生面のサポート 9β.敷地内の非飲用水再利用
N: 食	1.果物と野菜 2.栄養の透明性	3.精製成分 4.食品広告 5.人工的な原材料 6.一人前の分量	7.栄養教育 8.心豊かな食卓 9.特別食 10.食品の準備	11.責任ある食品調達 12.食品生産 13.地域の食環境 14.赤肉と加工肉
L: 光	1.光曝露 2.視環境照明デザイン	3.サーカディアン照明デザイン 4.人工照明のグレア制御 5.昼光利用デザイン戦略	6.昼光シミュレーション 7.視覚的バランス 8.人工照明の質	9.入居者による照明制御
V: 運動	1.活動を促す建物とコミュニティ 2.人間工学に配慮したワークステーションのデザイン	3.移動空間のネットワーク 4.アクティブ通勤のための施設 5.敷地の計画と選択 6.運動の機会	7.アクティブな家具 8.運動スペースと家具 9.運動の促進 10.自己モニタリング	11β.人間工学のプログラム
T: 温熱快適性	1.温熱性能	2.温熱快適性の検証 3.温度ゾーニング 4.個別の温度制御	5.輻射による温熱快適性 6.温熱快適性モニタリング 7.湿度管理	8β.一段上の開閉可能な窓 9β.屋外の温熱快適性
S: 音	1.音響マッピング	2.最大騒音レベル 3.遮音壁 4.残響時間	5.吸音性能のある仕上げ 6.暗騒音の最低基準 7β.衝撃音の管理	8β.音響機器の強化 9β.聴覚健康保全
X: 材料	1.材料の制限 2.有害な内装材の管理 3.クロム銅ヒ素系木材防腐剤と鉛の管理	4.敷地の浄化 5.材料制限の強化 6.揮発性化合物の制限 7.材料の透明性	8.材料の最適化 9.廃棄物の管理 10.有害生物管理と殺虫剤使用 11.清掃用品と清掃手順	12β.接触の制限
M: こころ	1.メンタルヘルスの促進 2.自然と環境	3.メンタルヘルスサービス 4.メンタルヘルスに関する教育 5.ストレス管理	6.回復の機会 7.回復のためのスペース 8.回復のプログラム	9.自然へのアクセスの強化 10.喫煙の禁止 11.薬物使用に関するサービス
C: コミュニティ	1.健康とウェルビーイングの促進 2.統合的なデザイン 3.緊急時のための準備 4.入居者調査	5.一段上の入居者調査 6.保健サービスと給付 7.健康とウェルビーイングの促進強化 8.新生児の親への支援 9.新生児の母親への支援	10.家族支援 11.市民参加 12.多様性と包摂 13.アクセシビリティとユニバーサルデザイン 14.緊急時の対応機器	15β.緊急時のレジリエンス 16β.アフォーダブルな住居 17β.責任ある労働条件の実践 18β.DV被害者の支援
I: イノベーション**		1.WELLのイノベーション 2.WELL APの参加	3.WELL教育 4.ウェルビーイングへの入口	5.グリーンビルディング評価システム 6β.炭素排出開示と削減

*βの付く評価項目は、試行運用中のものである。評価項目としての妥当性が確認されたら正式項目として採用されるが、逆に不採用の場合は消失する。βが付いていても正式項目と同じ条件でポイントとして加算される。

**イノベーションは、WELL認証にまだ含まれていない新しいConceptや健康的な環境をつくりあげる戦略を開発するユニークな取り組み、または既存の要件を超える結果を達成した場合にポイントが得られる。各Featureで取得できる加点Partの上限は12ポイントであり、上限を超えるポイントは1Partにつき1ポイントとしてイノベーションに最大10ポイントまで加算できる。

Table 2 WELL Health-Safety Ratingの評価項目 (参考文献2)を基に作成
Evaluation Items of WELL Health-Safety Rating

Themes/ 大項目	Features/ 評価項目	Themes/ 大項目	Features/ 評価項目
SC: 清掃・消毒手順	SC1. 手洗い支援	SA: 空気質・水質の管理	SA1. 換気の評価
	SC2. 表面接触の削減		SA2. 空気処理システムの評価と維持管理
	SC3. 清掃業務の改善		SA3. レジネ管理計画の策定
	SC4. 適切な清掃製品の選択		SA4. 空気質・水質のモニタリング
	SC5. 飛散粒子暴露機会の低減		SA5. 加湿と湿気管理
SE: 緊急時対応プログラム	SE1. 緊急時対応計画の策定	SS: ステークホルダーの関与とコミュニケーション	SS1. 健康・ウェルビーイングの増進
	SE2. BCPの策定		SS2. 食品検査情報の公開
	SE3. 健康的な再入場計画	SI: イノベーション	SI1~3. イノベーション提案, WELL APの参加
	SE4. 緊急時の資源提供		指定WELL項目取得, WELL取得
	SE5. 緊急時回復力の向上		SI4. Health-Safetyへの入口
	SE6. 入館要件の確立		
SH: 健康サービス資源	SH1. 病気休暇の提供		
	SH2. 医療給付の提供		
	SH3. メンタルヘルスの回復支援		
	SH4. インフルエンザワクチンの推進		
	SH5. 禁煙環境の推進		

Table 3 WELL認証に取り組むプロジェクト
WELL Certified and Pursuing Projects

建物概要	名称	大林組技術研究所本館テクノステーション
	所在地	東京都清瀬市
	建物用途	事務所
	延床面積	5,535 m ²
	規模	地上3階
	竣工	2010年 9月
WELL認証	認証システム	WELL v1
	認証レベル	ゴールド
	取得	2017年 11月, 2022年 5月
WHSR	取得	2021年 4月, 2022年 4月
建物概要	名称	Port Plus®
	所在地	神奈川県横浜市
	用途	研修施設
	敷地面積	563.28 m ²
	規模	地下1F, 地上11階
	竣工	2022年 5月
WELL認証	認証システム	WELL v2 pilot
	認証レベル	予備認証
	取得	2020年 9月
建物概要	名称	某ホテル
	所在地	京都府京都市
	用途	ホテル(4~9F), 商業施設(1-3F)
	敷地面積	3,800 m ²
	客室数	141
	竣工	2019年 11月
WELL認証	認証システム	WELL v1
	認証レベル	ゴールド
	取得	2020年 8月



Fig. 1 各プロジェクトの外観・内観と認証マーク
Outside and Inside View of Projects

以下のe)からi)は特に対応せずに要件を満たした。

- e) 自然採光を大開口から取り入れる執務空間は、人間の体内リズムの調整や知的生産性向上への寄与が期待できる空間として評価された。IWBIのWEBサイトに光環境デザインの好例として紹介されている(Fig. 2)。
- f) 建物出入口にエレベータよりも近接して設置された階段や内階段などが、屋内フィットネス動線として評価された。
- g) ICタグによる空調の個別制御や、建物使用者による作業スペースの温熱環境選択性が評価された。
- h) 入居後調査の継続的な実施や、育児・介護休暇制度、チャリティ活動への補助プログラム、健康管理センターの設置やメンタルヘルスサポートといった福利厚生に関連する施策が評価された。
- i) 施設内のアートワークや、自然豊かな周辺環境も、情緒的な健康を育む施策として評価された。

3.2.2 SDの効果検証⁴⁾ WELL認証では、座位・立位両方での執務が可能なSDの導入が求められる。これは、

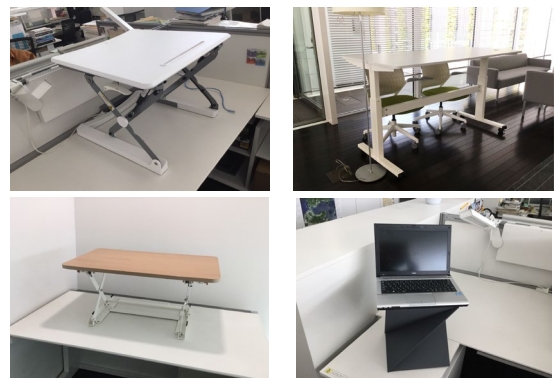


Photo 1 導入したSDの例
Example of Installed Standing Desks

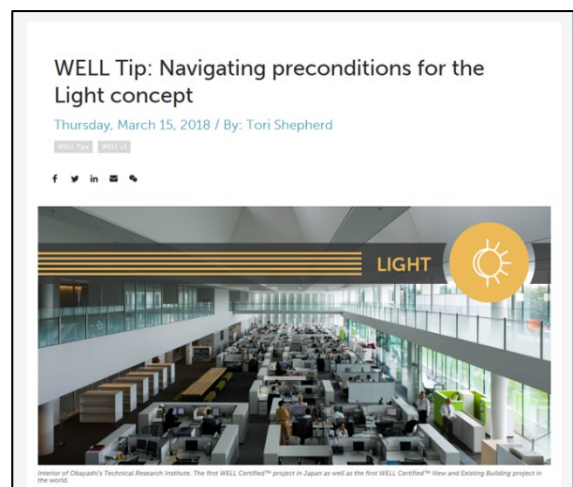


Fig. 2 IWBIホームページで紹介された光環境
Light Environment Introduced as Best Practice

出典: IWBI WEBサイト(<https://www.wellcertified.com/en/articles/well-tip-navigating-preconditions-light-concept>)

自由に身体位置や姿勢を選べるようにすることで、身体的緊張の緩和と人間工学に基づいた快適性と身体安全性の最適化を目的としている。

本建物では、導入したSDの心身の健康や生産性への効果の検証実験を行った(Photo 2)。実験結果から、SD環境に肯定的な人(SDの導入に満足し、使いやすいと思っている人)は、業務効率向上の実感を介してSDの利用が心身のリフレッシュに良い影響を与えたことが示された。

3.2.3 WHSRの取得 WHSRの取得要件の理解と提出書類の作成や取得手続きに係る作業量およびスケジュール感を把握するために、WHSR取得を試みた。申請費用は、WELL認証と同時に審査申請を行うことで免除されることから、2020年11月のWELL認証の更新手続きに合わせて審査申請を行った。

提出書類の多くは、WELL認証の提出書類を転用して作成が可能であったが、新規作成が必要な項目もあった。取得に必要な15項目に数項目の余裕を持たせて提出書類を作成し、2021年4月に初回WHSRを取得した。以降、2022年4月に1回目の更新手続きを行った。

3.2.4 WELL認証の更新 WELL認証は3年ごとの更新手続きに際し、大規模改修工事が行われていなければ、1回に限り、前回と同じ評価基準の下で審査申請ができる(最新版の適用も可)。本建物は、初回と同じ評価基準(v1)を適用した。建築や設備などのハード面、運用管理面



Photo 2 SD利用の計測実験風景
Experimental Scene at Individual Desk

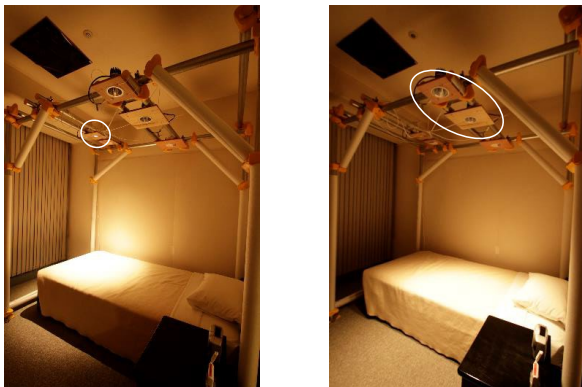


Photo 3 照明制御システム検証実験風景
(左：入眠前制御，右：起床前制御)
Experimental Scene of Lighting Control System

ともに要件適合に影響を及ぼす変更を行っていないため、新規対応項目はない。

書類審査は、要件適合を示す書類に加えて、認証取得以降定期報告を行った各種点検記録や居住者満足度アンケート結果などが審査された。現地審査では、目視検査は行われず、環境測定のみ行われた。再認証の審査申請は2020年11月に行ったが、COVID-19の影響により審査プロセスは滞り、最終的に2022年5月に再認証を取得した。

3.3 某ホテル

大林組が設計施工した本ホテルは、「健康的でクオリティの高い生活」「自然環境との共生」「環境保全」をコンセプトとしたライフスタイル体験型ホテルとして計画された。大林組は計画当初より本ホテルのコンセプトとWELL認証の親和性の高さを認識し、認証取得を提案した。取得支援にあたっては、当時のWELL認証(v1)はホテルを評価する枠組みを持たなかったため、建築主と連携しながらIWBIと交渉を進めてホテル向けに評価基準をカスタマイズした。そして2020年8月にホテルとして世界初となる認証をゴールドで取得した。

3.3.1 独自性の評価 本ホテルの独自性や取り組み姿勢で評価された内容を以下に示す。

- スムーズな入眠と起床を促す効果を期待して全室に導入された照明制御システム。
- 客室を含む内部空間や中庭に施された地域の文化や環境に根差したデザイン。
- 中庭の大緑化壁とWELL認証の要件である水景装置に変わる「枯山水」の設置。
- 宿泊客向け体験プログラムの提供や健康への意識づけを高めるオリジナルアメニティの設置。

3.3.2 照明制御効果検証⁹⁾ WELL認証の「サーカディアン照明デザイン」の項目では、光による非視覚的影響を司る内因性光感受性網膜神経節細胞(iPRGC)の光感度特性に戻づく光曝露量に配慮することが求められている。一方、光の暴露履歴に関しては推奨要件が設定されていない。また、就寝前の低色温度化による効果と、起床前の漸増光照射による効果的な組み合わせについての既往報告はない。そこで、3.3.1項のa)で示した照明制御システムの客室への導入に先立ち、検証実験を行った(Photo 3)。

検証実験では、就寝前と起床前における照明の色温度と調光制御が眠りと目覚めに与える影響を検証した。実験の結果、就寝前の低照度・低色温度化は生理的に有意に良い影響を与えること、また、起床前の漸増光照射により生理的な覚醒度、起床時の主観的な睡眠評価が向上する傾向がみられた。

3.4 Port Plus

本研修施設は、全ての地上構造部材(柱・梁・床・壁)を木材とした高層純木造耐火建築物である。木材利用によるCO2排出量の削減と、木の特性を活かしてウェル

ビーイングに配慮した空間提供を目指している。建物内部は、フロアごとに集合研修やディスカッション、個人ワークスペースなどの用途が定められている。また、使用目的に沿って木や緑、光を使った五感を刺激する空間演出により、心身を整えるしつらえとしている。

本研修施設は、短期滞在者用の研修スペースと宿泊室、常勤の施設管理者用執務室が混在するため、複雑な評価項目構成の下でWELL認証取得に取り組んでいる。2020年9月に予備認証を取得し、2022年9月末時点では、WELL認証の本認証とあわせてWHSRの審査中である。

4. 課題

4.1 WELL認証の課題

WELL認証は換気量、窓配置、遮音性能等ハード的な要求性能が一般的な建物より高く設定されているので多くの場合、新築や大規模改修工事計画中のプロジェクトが取り組む。技術研究所本館のように計画当初から高度に健康・快適性に配慮したプロジェクトでない限り、既存建物で取得することは困難である。また、WELL認証は計画から建物の運用開始以降に行われる現地審査まで、認証取得の過程は長期にわたる。一方、WHSRは主として運用面が評価対象であること、提出書類のみで審査されることから通常数カ月で取得プロセスは完了する。ここでは、プロセスが長期にわたるWELL認証に取り組む上での課題を、プロジェクトマネジメントと認証システムの両面から記す。

4.2 プロジェクトマネジメント上の課題

WELL認証取得に向けては、オーナー、設計者、施工者、入居者サイドの運営管理者（人事・総務部門）、ビル管理者等の多くの利害関係者の関与が求められる。まず、WELL認証取得の位置づけに対する共通認識を持つことが重要である。要件を満たすためには、意匠デザインや什器・備品、清掃・衛生用品の選択等、各担当者のポリシーに沿わない対応を求められることが多々ある。認証取得が経営判断としての決定事項であり、建物の健康性能の対外的な可視化手段であることが周知徹底されないと、合意形成や妥協点を見出すことは困難になる。

また、当初はWELL認証の要件に対応した仕様であっても、室用途や什器備品などがいつの間にか変更されることも多い。当初決められたものがWELL認証の要件に関わっていると認識が希薄であると、それらの変更は関係者に周知されにくく、場合によっては手戻りが発生する。注意を払っていてもプロセスが長期に及ぶほど取りこぼしリスクは高まる。

4.3 認証システムの課題

WELL認証は年4回Addenda（追補版）が発行され、マイナーチェンジが行われる。評価要件だけではなく、運用ルールも頻繁に変更されるため、常に点検が必要であ

る。当初は、認証システムのフレームワークだけが先行して運用が進み、要件に関しては曖昧な部分が多かった。しかし取得を目指すプロジェクトが増えるにつれ、要件が具体的に明示され厳格に適用されるようになってきた。これに伴い、要件の意図に沿った性能を示すことで承認を得るAAP(Alternative Adherence Path)の審査も厳格化が進み、手間とコストがかかるようになってきている。要件が明示されるようになった一方で、閾値設定の根拠とされる元文献を調べるとそこには閾値まで書かれていないこともある。

WELL認証は認証システムとしての課題もあるが、あらゆる用途に対応した認証システムは他に例がない。健康的な建物のグローバルなベンチマークであり続ける限り、対応が必要と考える。

5. まとめ

本報では、健康的な建物の第三者評価制度として世界的な実績を誇るWELL認証とWHSRについて、以下に示す概要と大林組の取組み内容、課題を報告した。

- 1) 建物の健康性能の第三者評価制度への要請は一層高まり、世界的に実績のあるWELL認証とWHSRは今後も普及すると思われる。
- 2) 大林組は技術研究所本館をはじめ、ホテル、研修施設と異なる用途でWELL認証に取り組む、検証実験と併せて認証取得のノウハウを蓄積してきた。
- 3) WELL認証取得に向けては、プロジェクトマネジメントと認証システムそのものの課題に留意する必要がある。

今後も、自社のリソースを活用した検証実験やエビデンス整備により要求性能を満たしてきた強みを活かして、人々の健康とウェルビーイングに配慮したビルト・エンバロメントを探索する。

参考文献

- 1) International WELL Building Institute, pbc: WELL v2™ DYNAMIC. RESILIENT. VALIDATED. The next version of the WELL Building Standard™, 330p., 2020
- 2) International WELL Building Institute, pbc: WELL HEALTH-SAFETY RATING FOR FACILITY OPERATIONS & MANAGEMENT, 60p., 2022
- 3) 吉野攝津子: 大林組技術研究所本館テクノステーション「WELL認証」の取得, 大林組技術研究所報, No. 82, 2018
- 4) 山田昇吾: 大林組技術研究所本館テクノステーションにおけるスタンディングデスク導入効果に関する研究, 大林組技術研究所報, No. 82, 2018
- 5) 望月悦子他: 就寝前・起床前の照明条件が睡眠に与える影響, 日本建築学会学術講演梗概集, 40239, pp. 487-488, 2020